

〔研究ノート〕

## 国際学部におけるインタープリター養成カリキュラム開発のための予備的調査

海津ゆりえ・井上由佳

〔Research Notes〕

### Preliminary study of curriculum development for ‘Interpretation’ at the Faculty of International Studies

Yurie KAIZU Yuka INOUE

#### Abstract

This study aims to investigate the historical background and the development of “interpretation” and to incorporate its results to the forthcoming curriculum modules named Interpretation 1 and 2. It is obvious that the demand of education program for interpretation skill is increasing among students and in the field of tourism, museums and international understanding. Authors have studied the recent development of this kind of curriculum in universities, and to look for ideal programs in teaching interpretation. For latter purpose, first, we examined interpreter training programs run by Japanese universities, museums and also undergraduate programs from the U.S. and a graduate program from the U.K. Second, we studied a training program run by the National Association for Interpretation, based in the U. S. as a model. The results shall contribute in our new curriculum development for interpretation at a undergraduate level.

#### はじめに

##### (1) 研究の背景

文教大学国際学部では、2012年度の本学部のカリキュラム改訂に合わせて観光や国際理解教育、博物館に軸足を置いた。「インタープリテーション」をカリキュラムに組み込み、ホスピタリティをもったインタープリターの養成に取り組むこととなった。

地域における交流(観光)や、博物館等の文化施設において、ガイドや学芸員等の案内者の存在が参加者の体験の満足度を左右する要因であることについては論を待たない。単なる観光ガイドや案内を超えて、利用者に双方向性のコミュニケーションによってメッセージを伝え、より深い理解と新しい発見を促す役割を果たす者を「インタープリター」と呼ばれている。近年、インタープリターの存在が様々な分野で重視されるようになってきた。とくに観光分野では、職能としてのガイドに限らず、あらゆる場面でインタープリターが求められると言ってよい。

後述するように、インタープリテーションは技術であり、適切なカリキュラムによって学び、体得できるものである。既に大学や科学館等で、サイエンス・コミュニケーターやアート・ナビゲーターの養成が行われているが、インタープリター養成カリキュラムはほとんど実施されていない。そこ

で本研究は、カリキュラム創設の準備段階として、インタープリター養成に関する国内外の現状を明らかにし、カリキュラムの具体的設計に資するために行うこととした。

なお、本研究は、国際学部平成22年度共同研究の一環として実施したものの報告である。

## (2) 研究の目的

本研究は次の3点を明らかにすることを目的とした。

- ①インタープリター養成カリキュラムの国内動向
- ②インタープリター養成カリキュラムの海外動向
- ③インタープリター養成カリキュラムの内容(事例調査)

## (3) 研究の方法

研究方法は、次の方法により行った。

### 1) インターネットや論文等による文献研究

主として、国内外におけるインタープリター養成機関や大学等高等教育機関におけるカリキュラムについての実態を把握した。

### 2) インタープリター養成セミナーへの参加

インタープリター養成に関する国際機関である National Association for Interpretation (NAI、本部米国コロラド州)が毎年実施しているセミナーのうち、2010年10月24～29日に開催された「インタープリター養成トレーナー向け講習会」に海津が出席したものである。セミナー参加の目的は、①カリキュラムの構造調査、②インタープリター養成に関する国際機関とのネットワーク構築、③テキストの取得の3点とした。取得した関連テキストは、一部を翻訳したが、本研究ノートでは掲載を割愛する。

## 1. インタープリターとは

### (1) 自然分野におけるインタープリテーション

#### 1) 語義と発祥

インタープリテーションの語義を直訳すれば『通訳』であり、インタープリターとは『通訳者』であるが、米国の国立公園で利用者サービスの一つとして導入された「自然解説活動」の呼称として用いられて以来、意味を拡げて使用されることが多くなった。

インタープリテーションの創始者としてよく知られているのは、イーノス・A. ミルズ(Enos A. Mills, 1870-1922) (写真1) とフリーマン・チルデン(Freeman Tilden, 1883-1980) (写真2) である。ミルズはインタープリテーションのみならず、米国におけるネイチャーガイドの草分けとして知られている。コロラドに生まれたミルズは山を愛し、1889年から晩年の1922年まで、ガイドとして、コロラド州のロッキー山脈の14,256峰へ多くの来訪者を案内し、自然についての15本の著作や講義活動を行った。彼の活動は後のロッキー山脈国立公園の設立やトレイル・スクール(環境教育プログラムの草分け)等の基礎となった。ミルズのガイド論は、「ネイチャーガイドは、言葉による案内役や教師ではなく、直感や豊かな情報を総動員して何かを伝えるもの」というもので、その結果、教育的効果を生むものだ」と述べている。彼は自らの解説に対する参加者の反応を分析してインタープリテーション技術の確立を図り、後に米国国立公園職員の一分野となるまでに、インタープリテーションを専門職として育てた(Regnier, 1992)。



写真1 Enos A. Mills

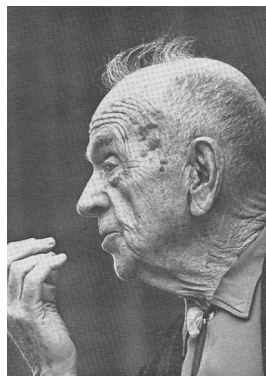


写真2 Freeman Tilden

(出所: Kathleen Regnier 他(1994)<sup>Ⅲ</sup>)

一方、チルデンは新聞記者や脚本家としての経歴もっていたが国立公園局の依頼でインタープリテーションの効果について取材をする間に興味を高め、自然保護官(レンジャー)の行動や言動、来訪者との対話などを観察し、表現方法の多様性と来訪者の反応の多様性について取材を重ね、著作『*Interpreting Our Heritage*』(Tilden, 1957 他)等を通してインタープリテーション技術の基本を説いた。同書でチルデンは、インタープリテーションとは「本物とのふれあい体験や説明用のメディアを通して、事実や情報ではなく意味と関係性を伝える教育的な活動」であると述べている(Regnier, p3)。

チルデンは、インタープリテーションの6原則を次のように整理している<sup>i</sup>。

1. インタープリテーションは、参加者の個性や経験と関連づけて行われなければならない。
2. インタープリテーションは、単に知識や情報を伝達することではない。インタープリテーションは啓発であり、知識や情報の伝達を基礎にしてはいるが、啓発と伝達は同じものではない。ただし知識や情報の伝達を伴わないインタープリテーションはありえない。
3. インタープリテーションは、素材が科学、歴史、建築、その他何の分野であれ、いろいろな技能を組み合わせた総合技能である。技能であるため、人に教えることができる。
4. インタープリテーションの主目的は教えることではなく、興味を刺激し、啓発することである。
5. インタープリテーションは、事物事象の一部ではなく、全体像を見せるようにするべきものである。相手の一部だけでなく、全人格に訴えるようにしなければならない。
6. 12歳くらいまでの子どもに対するインタープリテーションは、大人を対象にしたものを薄めて易しくするのではなく、根本的に異なったアプローチをするべきである。大きな効果をあげるためには、別のプログラムが必要である。

## 2) 米国における展開

米国は世界最初の国立公園を作った国であり、1872年にイエローストーン、1890年にヨセミテ、1910年にグレイシャーが国立公園に指定され、国立公園実施法(原語 National Park Service Organic Act)が制定された1916年以後国内各地で国立公園が誕生し、自然保護と国民による自然景観の共有のために国が予算をつけて積極的な保護と利用を図るようになった。そしてインタープリテーションを実践し、多大な実績を作ったミルズと、ミルズの実績を理論的に裏付けて教育カリキュラ

ムに育てたチルデンの功績により、米国の国立公園は1960年代に至って利用者サービスの一つとして、インタープリテーションを専門職員の業務の一つに位置付けた。すなわちインタープリターの雇用枠を国立公園レンジャーの中に確保したのである。

国立公園におけるインタープリターの役割は多岐に亘る。ヨセミテ国立公園では通常期350名、夏季650名を超えるレンジャーのうち数十名がインタープリターとして雇用されており、さまざまな種類のインタープリテーションが行われている<sup>ii</sup>。さらに、ヨセミテ国立公園には、インタープリター養成のための民間人材養成機関として「ヨセミテ・インスティテュート」が設立されており、教育現場の人材等を対象に、数日間の自然体験プログラムを実施している。米国国立公園を管理する内務省国立公園局(National Park Service)は、自然公園以外にレクリエーション地域や戦跡公園、史跡公園等20以上の種類の国立公園を管理している。そのため、インタープリテーションに関しても、自然公園のみならず文化や歴史などをわかりやすく人々に伝える活動へと応用され、他の公園や博物館等でも展開されるようになった<sup>iii</sup>。

### 3) 日本における展開

米国の国立公園の初例が1872年であったのに対し、日本は1934年の瀬戸内海、雲仙天草、霧島屋久国立公園の指定が初例である。日本の国立公園制度は、設立目的を「すぐれた風景地の保護」とし、‘見ること’に重点を置くものであり、自然体験や自然理解を目的とした米国との差異があった。そのため米国の制度に倣って国立公園制度を導入した日本であるが、インタープリターを導入するには至らず、現在においても自然保護官(レンジャー)の業務範囲にインタープリテーションは明確には位置づけられていない<sup>iv</sup>。

インタープリテーションの概念の日本への導入は、日本環境教育学会が設立された1990年前後であり、教育現場や環境教育団体等が着目したことによるものであった。インタープリテーションの普及に関わる1990年前後からの動きとして、次の表1に示した団体の活動が挙げられる。

表1 ガイド養成講座の例

年	関連団体の動き	備考
1978	財団法人日本自然保護協会「自然解説指導員」講座開始	現在25,000人を超える地域の指導員を養成 <a href="http://www.nacsj.or.jp/sanka/shidojin/index.html">http://www.nacsj.or.jp/sanka/shidojin/index.html</a>
1986	キープ協会環境教育事業部設立	財団法人キープ協会(1956年、山梨県清里町に設立した研修施設)内。国内における環境教育指導者を養成。
1992	キープ協会	環境省環境教育指導者養成セミナー 清里インタープリターズキャンプ受託(現在に至る)
1990	日本環境教育学会設立	環境教育研究者およびインタープリターのネットワーク組織
1993	日本ネイチャーゲーム研究所設立	現・社団法人ネイチャーゲーム協会(1997～)の前身。現在10,000人を超えるネイチャーゲーム指導員を養成。 <a href="http://www.naturegame.or.jp/information/a/000235.html">http://www.naturegame.or.jp/information/a/000235.html</a>

上記の公的法人の他、自然教育研究センターや生態計画研究所などの民間企業でインタープリター養成や、公立ビジターセンターの指定管理を受けて自らインタープリテーション活動を実施している機関も存在する。これらの組織の活動では、いずれも「インタープリテーション」の手本をもちばら米国国立公園での活動に置いていたことから、インタープリテーションは当初「自然解説」と訳

され、インタープリターは「自然解説員」と呼ばれた。このことが日本ではインタープリテーションの対象は「自然」という偏った解釈を生み、その後長い間に亘り、文化施設等へのインタープリテーションの普及や導入を遅らせる要因となった<sup>v</sup>。

環境教育とインタープリテーションの異同について、Knapp(1998)は、両者が目標とするところは同じだが、環境教育はもっぱら学校教育において教育指導要領に基づき長期間指導によって習得しなければならないものであるが、インタープリテーションは自主的な参加者に対して短期間の経験を提供するものであると整理している。また環境教育は習得目標があり、学習による態度変化を求めるものであるため教育方法や効果測定に関して、研究や実証実験等が行われているが、インタープリテーションについては必ずしもそのようなことは必要とされていない。そのことによって、インタープリテーションは厳密な成果を求めずに応用できるものとして、適用範囲を広げてきたと言える。

#### 4) 日本におけるインタープリターの現状と課題—自然・観光分野

近年、インタープリテーションは、とくに観光分野で重視されるようになってきた。現在、日本の国立公園では米国のような制度的に組み込まれたインタープリターは存在しないが、全ての国立公園において民間ガイド事業者によるエコツアーが催行されている(日本エコツーリズム協会<sup>vi</sup>ほか)。エコツアー等のガイド付きツアーにおける解説をインタープリテーションと呼び、ガイドという一般呼称に加えてインタープリターと称する地域も少なくない。一例として、小笠原ホエールウォッチング協会では、協会独自の事業として鯨類に詳しくツアーガイドとして来訪者を案内することができるインタープリターを養成し、認定<sup>1</sup>するシステムを立ち上げ、運営を行っている。そこには単なる情報伝達型のガイドではなく意味やメッセージを伝えるガイドを提供できるという、サービスの質的保証を通して地域主体の観光ビジネスへの信頼度を高める戦略がある。

公的機関および民間によるインタープリテーションを含むガイド養成制度として、代表的な例を挙げると表2の通りである。

表2 ガイド養成制度例

名称	地域・分野	実施主体
行政主導型		
屋久島ガイド登録・認定制度	屋久島	屋久島地区エコツーリズム推進協議会
尾瀬認定ガイド制度	尾瀬	尾瀬認定ガイド協議会
北海道アウトドアガイド資格制度	北海道	NPO法人北海道アウトドア協会
東京都(小笠原・御蔵島)自然ガイド養成認定制度	東京都環境局	
福島県ツーリズムガイド養成研修制度	福島県	福島県ツーリズムガイド連絡協議会
民間型		
山岳ガイド認定制度	山岳・登山・自然	社団法人日本山岳ガイド協会
森林インストラクター資格試験	森林野外活動	社団法人全国森林レクリエーション協会
自然観察指導員	自然観察会等	財団法人日本自然保護協会
エコツアーガイド養成講習会・エコツアープロデューサー養成講習会	エコツアー	NPO法人日本エコツーリズム協会

1「小笠原ホエールウォッチング協会HP」<http://www.h2.dion.ne.jp/~owa/nintei2/nintei.html>

## (2) ミュージアム・文化施設分野におけるインタープリテーション

### 1) 発祥

ミュージアムや文化施設(以下、ミュージアム等と略す)におけるインタープリターの発祥を明確に位置付けることは難しい。というのも、ミュージアム等にはインタープリターという言葉が広まる以前より、このような役割を担ってきた人々が別の呼称(ギャラリーガイド、ドーセント、展示解説員等)で存在していたからである。それでは、ここでいうギャラリーガイドたちが展示資料の歴史や背景を一方向的に解説するのではなく、チルデンが提唱したようなインタープリテーションの6原則に即したツアーをしていたのか、といわれるとその点については定かではない。ゆえに彼らをインタープリターと位置付けることができるかどうかとも難しい問題である。しかしながら、展示室で何かしら人を介したやり取りをしていた人々も一種のインタープリターであると捉え、それを発祥とするならば、おそらく20世紀初頭に欧米の博物館(特に自然史系)における教育活動が意識されるようになったころから、ミュージアム等でギャラリートークのようなインタープリテーションを含む活動が少しずつ始まったものと思われる。

インタープリターとはインタープリテーションを担う人のことである。それではミュージアムにおけるインタープリテーションとは何か。英国の博物館学研究者であるフーパーグリーンヒル(Hooper-Greenhill)は次のように述べている：

博物館で使われているインタープリテーションの意味は、外の世界では必ずしも通用しない、特殊な使われ方をしていると思います。(略)辞書を紐解くと、interpretationには大きく二つの意味が書かれています。一つは、他者のために行うインタープリテーションで、もう一つは自分自身のために行うインタープリテーションです。

他者のためのインタープリテーションとは、だれかに翻訳してもらった場合などがそうで、インタープリテーションと翻訳(translation)は同義で使われます。博物館においてもそのような使われ方、つまり、他者に対する「翻訳」という意味で使われます。その際、博物館が言いたいことを人々に理解してもらうために行ったあらゆる形のことをインタープリテーションと呼びます。例えば、インタープリテーションの担当スタッフだったり、展示フロアにいるインタープリターだったり、展示の解説装置だったりします<sup>vii</sup>。

このようにミュージアムの文脈で意味するインタープリテーションは、その他の環境で使われる場合と意味合いが異なることが指摘される。

ミュージアム等におけるインタープリテーションおよびインタープリター導入の発祥は、前節で詳述されている1960年代の米国国立公園(US National Park Service)で始まったものに端を発している。英国の文化遺産(English Heritage)や産業遺産(Industrial Heritage)の現場で行われているインタープリテーションの活動も、米国の国立公園での活動に強く影響を受けており、英国の場合は1980年代から1990年代にかけて文化遺産等を対象としたインタープリテーションが発展していったという<sup>viii</sup>。

### 2) 日本における展開

ミュージアム等におけるインタープリターの日本における展開は、大きな流れとして、1990年代後半より展示をはじめとするミュージアム活動において、来館者を中心に据えてその運営を考えていくという考えが、教育普及活動とともに広がったことがあげられる。それまでの多くのミュージアム等では、一部のケースを除いて、展示は「分かる人が見れば良い」という姿勢で公開されるも

のが多く、専門家やマニアックな人々しか満足しないものであった。換言すれば、知識レベルや経験が様々な一般の人々に向けて見せるという意識が必ずしも高くなかったのである。しかし、欧米のミュージアムで定着し始めた来館者研究(Visitors' Studies)やインタープリテーションといった概念が日本にも紹介されるにつれ、ミュージアム活動は多くの人々にとり有益な形をとる必要があるという意識に変わってきたといえよう。これには公共施設としてのアカウントビリティ(説明責任)に応えることが社会的にも求められてきたという背景も影響している。

このような大きな流れの中で、日本のミュージアム等においてもインタープリテーションのあり方についても近年、検討されるようになってきた。

### 3) 日本におけるインタープリターの現状と課題—文化施設・ミュージアム分野

日本のミュージアム等におけるインタープリターの現状を考えてみたい。まず、インタープリターおよびインタープリテーションという言葉がまだ広く定着していない上、その用い方には混乱が見られる。藤田が指摘するように、インタープリター以外にもファシリテーター、エデュケーター、コミュニケーター、ナビゲーターといった名称がカタカナのまま使用され、原語とは異なる意味合いで使われているケースもある<sup>ix</sup>。特にインタープリターとコミュニケーターの用法は混在しており、科学技術系のインタープリターのことを日本では「サイエンス(科学技術)コミュニケーター」と呼ぶことが多い。この呼称は、文部科学省が発表した第3期科学技術基本計画の第3章科学技術システム改革1、1、人材育成、確保、活躍の促進の項目の中に、「科学技術コミュニケーター養成」があり、「科学技術を一般国民に分かりやすく伝え、あるいは社会の問題意識を研究者・技術者の側にフィードバックするなど、研究者・技術者と社会との間のコミュニケーションを促進する役割を担う人材の養成や活躍を、地域レベルを含め推進する」とある<sup>x</sup>。インタープリターという名称は前節にあるように、主として自然を扱う場面や環境教育の現場で用いられているようである。

ミュージアム等でインタープリターとして活躍したい場合、まずは大学や試験で認定される資格である博物館学芸員を取得し、ボランティアや大学院生の場合はインターンとして現場で長期的に経験を積んでいくことが望まれる。科学技術コミュニケーターになりたい場合は、いくつかの大学院で開講されているコースを履修するか、国立科学博物館や日本未来科学館といったミュージアムで研修を受けて修了証をもらうというパターンもある。いずれにせよ、国家資格のような全国で通用するインタープリターという資格はなく、まだその名称も広く認識されていないのが現状である。

また、文化施設等におけるインタープリターの理念や目標を見れば、環境教育等に携わるインタープリターと共通する部分がたくさんあるにも関わらず、双方の交流やネットワーキングがされていないことが大きな課題である。日本のインタープリター養成の体制を整備していくためにも、両分野をつないでいくことがまずは必要ではないかと思われる。

## 2. インタープリテーション技術とは

ここでは、インタープリテーション技術とはどのようなものであるかについて、文献調査をもとに整理する。主要参考文献はCaputo他(2008)<sup>xi</sup>、Brochu他(2008)<sup>xii</sup>、Regnie(1998)<sup>xiii</sup>等である。

Brochuは、インタープリテーションとは「実事情報を伝えることより、直接の経験や、説明に役立つメディアによって、意味や関係性を明らかにすることを目的とする実際的な教育である。観衆の興味と資源本来の意味の間を感性と知性で結ぶコミュニケーション手段である。」と要

約している。そのインタープリテーションには、①人を介したインタープリテーション(personal interpretation)と、②媒体を用い、人を介さないインタープリテーション(nonpersonal interpretation)とに区分される。後者は展示や紙媒体、ビデオなどの映像、サイン等によるインタープリテーションである(写真3)。①は自然分野や観光分野で実地に必要とされる技術であり、②は博物館やビジターセンター等で必要とされる技術である。

‘Certified Interpretive Guide Training Workbook’ (Lisa, 2010) より、人を介したインタープリテーションにおける重要な点を抽出すると、

- 来訪者を理解し、来訪者と対象を関連づけ、伝わりやすい方法で行う。
- 解説する対象をよく調べ、理解を深めてインタープリテーションを行う。出典がある場合は出典を伝える。
- 笑顔で来訪者に接し、五感と右脳・左脳を総動員させるように行う
- もっとも伝えたい「テーマ」を考え、これをベースとしてインタープリテーションの内容を構成する。テーマ(T)を伝えるためのサブテーマ(t1, t2, t3…)を決める。
  - T(序論) = t1 + t2 + … + tn = T(結論)
- インタープリテーションは、序論→主要部→結論という流れを持たせ、メリハリをつける
- 話し方(声・呼吸・ピッチ・発音・速度・声質・声量・間合いの取り方)や非言語コミュニケーション(態度・姿勢・手や体の動き・副総・アクセサリー・立ち位置等)に気を配る  
等がポイントとなる。同書ではインタープリテーションをより良いものにするためのチェックリストを挙げている。

#### プレゼンテーションのチェックリスト

##### 準備

- ・ プレゼンテーションの目的は明確に書いてあるか
- ・ あなたの聴衆を分析したか
- ・ アウトラインを準備し、テーマに沿った話とプレゼンテーションのアイデアをスムーズに連続して構成できているか
- ・ 正確さのためのサポート情報を調査し、質問を予想したか
- ・ 慎重にサポート資料と視覚的補助を選ぶ。それらは、関連性があり、ハイクオリティーか
- ・ プレゼンテーションの練習をしたか
- ・ 面白いプログラムを提供し、理解しやすいタイトルだったか
- ・ あなたのプログラムはハンドアウトが必要か、また、ハンドアウトを準備したか
- ・ 有効性と必要条件のために、全ての準備をチェックしたか

##### プレゼンテーションの前に

- ・ ミーティングルームまたは、道をチェックしたか
- ・ 全ての準備を設置したか
- ・ 照明、プロジェクター、ドアなどを手伝ってもらうために誰かに約束したか

##### プレゼンテーション

- ・ 何か必要な発表をしたか



- ・あなたの序論は歓迎、関心の惹きつけを含み、そして、プレゼンテーションの場を作り上げたか。
- ・あなたの団体の名前を入れ込んだか
- ・テーマとサブテーマを含めたか
- ・スムーズに進められたか
- ・迷惑な体の動きは、避けたか
- ・スライドへの直接的な言及は避けたか
- ・テーマを固定し、内容を誇張しなかったか
- ・結論を強調して終えたか

□聴衆への思いやり

- ・情熱を持ち話せたか
- ・聴衆にアイコンタクトをし続けたか
- ・フレンドリーに会話するように話せたか
- ・聴衆の興味と経験を関連させたか
- ・質問、例、ストーリー、実例、を使えたか
- ・引用、証言、ナレーションを使ったか

□言葉

- ・つなぎ言葉、不必要なまたは、繰り返した言葉のような話す時の癖を使わなかったか
- ・ふさわしい言葉を使い、専門用語を説明したか
- ・聴衆みんなが聞けるように声量を合わせたか
- ・正しく、はっきりと言葉を発音したか
- ・強調や重要性を加えるだけでなく、声質も変えたか

□フィードバックと評価

- ・聴衆の反応やフィードバックに気づいたか
- ・時間通り始め、時間通り終わったか
- ・誰かから批評をもらったか

### 3. 国内外におけるインタープリターおよびコミュニケーター養成課程

#### (1) 国内の大学・大学院

日本の大学・大学院におけるインタープリターもしくは(サイエンス・科学技術)コミュニケーター養成課程の開設状況について、各校の公式ウェブサイトを中心に調査した。その結果、正式なコースとして設置している大学・大学院は極めて少なく、設置されている場合も大学院生や一般社会人を対象としたものであった。学部レベルの場合、この学部で学べば将来的にインタープリターやコミュニケーターといった職種に就くことができると紹介するに留まるケースが多く、特別なインタープリター養成プログラムをカリキュラムの一部として実施しているものは、アート分野を除き、今回調査した範囲では見つけることができなかった。

大学で見ていくと、次の学部・学科においてインタープリターもしくはコミュニケーター(ナビゲーター)に関連する内容を学ぶことができる。

表3 インタープリター、コミュニケーター関連科目を有する大学

大学名	学部名学科名	コース名
江戸川大学	社会学部現代社会学科	「環境学コース」、「まちづくり・観光学コース」「博物館・社会教育学コース」
武蔵野大学	環境学部環境学専攻	—
帝京科学大学	生命環境学部自然環境学科	—
龍谷大学	理工学部環境ソリューション工学科	—
都留文科大学	文学部社会学科環境・コミュニティ創造専攻	—
京都造形芸術大学	芸術表現・アートプロデュース学科(ACP学科)	ACOP(Art Communication Project)

環境に関連した学科を持つ上記大学では、インタープリターもしくはコミュニケーターを養成する特別なコースはなく、むしろ上記学部学科で学んだ内容がインタープリターへの道にもつながるというニュアンスで紹介されている。学部・学科という枠組みではなく、授業単位で見えていくと、富山大学理学部の専門課程に「科学コミュニケーションⅠ・Ⅱ」という授業が開講されているという事例が見受けられる。おそらく他の大学・学部においても授業単位ではサイエンス・コミュニケーション等に関わるものが数多く開講されているものと思われる。しかし、学部あるいは学科全体で養成課程に取り組んでいるものはまだ少ないようである。

一方、美術館や芸術祭等のアートシーンで活躍することが期待されるインタープリター(ナビゲーター、ファシリテーター)に目を向けると学部レベルで養成している事例が見つかる。美術鑑賞を扱うアートコミュニケーションについては京都造形芸術大学芸術学部芸術表現・アートプロデュース学科(ASP学科)にて、ACOP(Art Communication Project)が2004年よりスタートし、作品と鑑賞者を結びつける「ナビゲーター(ファシリテーター)」となるためのコースが学科の必修科目として開講されている(<http://asp-k.com/asp/04.html>)。1回生春学期からこのプログラムがはじまり、1回生の秋学期には「観賞会」を開いて一般の人々を相手にナビゲーターの経験と積み、2回生になると全国の美術館や小中学校に赴きワークショップなどを運営するという。ACOPの場合は、学部1年から4年間かけて、アートのナビゲーターを育成するというプログラムがカリキュラムの一部として体系的に展開されている。卒業後はASP学科で身に付けた知識、スキル、実践経験を生かして学校教員や美術館の教育普及担当などとして活躍することが期待されるという。既に卒業生を輩出していることから、今後の動向が注目される。

今回の調査で、2011年時点の日本国内におけるインタープリターおよびコミュニケーター養成の主たる担い手は、一部の大学院および国立科学博物館や日本科学未来館のようなミュージアムが担っていることがわかった。大学院によっては学内院生のみならずその対象者を絞っており、対象範囲と人数が非常に限られている。プログラム内容を見ると、学内の講師陣のみならず外部講師を招くなど、理論だけでなく、実践も強く意識した充実したカリキュラムが組まれている。高いモチベー

ションを持った学生にとっては非常にやりがいのあるプログラムであろう。また、必要経費も最小限に抑えられており、自分の所属する研究科の卒業単位の一部としてカウントされるなど、履修しやすいように工夫されているようだ。

インタープリター・コミュニケーター養成プログラムを実施している主な大学院は以下の通りである。

表4 インタープリター、コミュニケーター養成プログラムを実施している大学院

大学院名	研究科等	プログラム名	対象者・人数
東京大学大学院	副専攻	科学技術インタープリター養成プログラム	学内全大学院生対象、各年10名
北海道大学	高等教育推進機構科学技術コミュニケーション教育研究部門(CoSTEP)		主に学内学生および教職員、一般社会人、本科：20～30名、選科：30～50名
早稲田大学大学院	政治学研究科	科学技術ジャーナリスト養成プログラム	政治学研究科生15名

北海道大学以外のコースは学内の大学院生のみが開かれたものであり、学外の院生ならびに社会人には門戸が開かれていない。上記大学院に所属する院生であれば、多少の費用負担は発生するにせよ、卒業までにサイエンス・コミュニケーター養成コースを修了した者として大学から認定を受けることができる。しかしながら、先述の通り、上記コースが対象とする層は非常に限られており、人数も少数であることから、まだ全国規模に至っていないことがわかる。

このように日本の大学、とりわけ学部レベルでインタープリター・コミュニケーターになることを意識したプログラムの開講が非常に限られている。その理由として、次の二点が考えられる。一点目として、この二つのポストあるいは職種そのものが日本社会にまだ広く認識されていないことに加え、このスキルの習得が昨今の大学にとって重要な評価指標の一つである卒業生の就職に直結するものではないとみなされていることがあげられる。二点目として、学部レベルでは、まずは、なぜインタープリテーションが注目され、必要とされるようになってきたのかといった歴史的経緯や現状とった導入部を学ぶことから始める必要があることに加え、まだ専門知識が未習得のためなかなか実践までに至らないという点があげられる。まずは、インタープリテーションの過去から現在までの変遷と今の姿を知ってから次の段階を考えてみるといった、このフィールドへの理解と問題意識を高めることから始める必要があるだろう。なぜなら、大学に入学した時点で、ほとんどの学生がインタープリターやコミュニケーターの存在を認識していないのが現実だからである。おそらく日本の高校までの学習および生活経験では、ほとんどこのような人々の存在を聞いたことがない人が大半であろう。ゆえに、最初にインタープリテーションの背景や現状を学び、実際に自分もガイドツアーに参加するなどの体験を経て、インタープリテーションへの興味関心が湧き、理解が深まってからはじめて実践に入っていくようにするには、大学院から本格的にトレーニングを積んだ方が良くとも考えられる。

## (2) 海外の大学・大学院

NAI(National Association of Interpretation, 全米インタープリテーション協会)の機関会員となっている7つの大学・大学院の中から本学学生が留学する可能性のある大学を中心に調べた。米国から2例、英国から1例、取り上げたい。

### 【カリフォルニア州立大学サクラメント校】

レクリエーション・公園・観光アドミニストレーション学部

California State University-Sacramento

Department of Recreation, Parks and Tourism Administration

6000 J Street | Sacramento, CA 95819-6110 | (916) 278-6752

<http://www.csus.edu/HHS/rpta/index.html>

この学部で習得できる学士号(レクリエーション・アドミニストレーション学士号: Bachelor of Science in Recreation Administration)はレクリエーション・公園マネジメント学科: Recreation and Park Management (Commercial Recreation, Tourism and Hospitality Management, Community Recreation Management, and Park and Recreation Resource Management)もしくはレクリエーション・セラピー学科: Recreation Therapyのどちらかに軸を置いて学ぶようになっている。レクリエーション・公園マネジメント学科はさらに4つの専攻に分かれるが、その中の公園・レクリエーションリソースマネジメント(Park and Recreation Resource Management)専攻の中に環境インタープリテーションとアウトドア教育(Environmental Interpretation and Outdoor Education)という専門科目を選択するようになっている。

他の専門科目は以下の通りである。

RPTA 34 – The Outdoor Recreation Experience (アウトドア・レクリエーション体験)

RPTA 148 – Experiential Education in Outdoor Recreation Settings (アウトドア・レクリエーションにおける経験教育)

RPTA 149 – Developing and Programming Adventure Experiences (アドベンチャー経験の開発とプログラミング)

RPTA 150 – Ecology of Resource Areas (リソースエリアのエコロジー)

RPTA 151 – Visitor Management in Recreation Areas (レクリエーションエリアにおける来訪者マネジメント)

RPTA 153 – Environmental Interpretation and Outdoor Education (環境インタープリテーションとアウトドア教育)

(<http://www.csus.edu/HHS/rpta/RPTA%20Options/Recreation%20Resource%20Electives.html> より引用)

この学部学科では、マネジメントという視点からアウトドア・レクリエーションや公園・自然資源の管理運営について学ぶ。卒業後は、アウトドア・レクリエーションを推進する機関(例: 農務省林野部等)や自然資源を管理する機関(例: ナショナルパーク・サービス)、アウトドア・レクリエーションを企画し運営する諸機関(例: カリフォルニア州公園・レクリエーション部企画課)等への就職を想定したプログラムである。その中で、環境インタープリテーションが必修科目となっ

ている。この学科では、アウトドア・レクリエーションおよび公園・自然資源のマネジメントという大きな枠組みの中に環境インタープリテーションを位置付けているのが特徴である。この他にも、他学部にも所属しながら、上記プログラムを副専攻(Minor)として履修することも可能で、例えば教育学部や経済学部の学生が学ぶことも推奨されている。

#### 【オレゴン州立大学林学部】

College of Forestry

Oregon State University

Corvallis, OR 97331-5704

Phone: 541-737-2004

<http://www.forestry.oregonstate.edu/>(※)

オレゴン州立大学の林学部(College of Forestry)には8つの学科があり、この中でインタープリテーションについて学ぶことができるのは次のコースである。

**Recreation Resource Management(レクリエーション資源マネジメントコース):** Plan and manage our natural resources to meet the challenges of providing quality recreation opportunities while maintaining the ecological integrity of those resources.(※上記サイトより引用)

このコースの狙いは、環境資源の保全と自然を活用した質の高いレクリエーションの供給を共存をさせるための計画とマネジメント手法について学ぶことである。このコースの中に設置された科目で環境資源インタープリテーション選択(Environmental Resource Interpretation option)を履修することで、人々に自然への理解を促したり、環境への新しい見識を持ってもらったりするためにはどうアプローチすれば良いのかを学ぶことができる。

この他にも、OSUの林学部では次のコースで観光学に軸を置きながら、上記のレクリエーション資源マネジメントを副専攻(Minor)として学ぶこともできる。

**Tourism and Outdoor Leadership(観光・アウトドアリーダーシップコース):** Acquire the skills to succeed in the domestic and international recreation and tourism industry, and to develop, facilitate, and lead outdoor recreation activities that contribute to personal growth and well-being. This program is offered on the OSU Cascades campus in Bend, Oregon.(※上記サイトより引用)

このコースでは、国内外レクリエーションと観光産業にて必要なスキル、人々の成長と幸福に貢献するようなアウトドアレクリエーション活動を開発して、運営し、リードしていくためのスキル学ぶことができる。

米国の二つの大学に共通する特徴は、自然環境を生かしたレクリエーション(娯楽・保養)のマネジメントを学術的に捉え、その研究成果や実践を体系化し、学部のカリキュラム化に成功していることである。その中の一つの手法として環境インタープリテーションが位置付けられていることも興味深い。また、日本におけるインタープリテーションが環境学・環境教育や科学技術もしくは芸術といった分野とリンクさせているのに対して、米国の上記の事例では、環境のみならずレクリエーション資源という概念の中に含めているところが異なる。日本ではレクリエーション学と呼べるものはまだ発展途上であり、大学で本格的に学ぶことも難しいであろう。日本の大学とは異なる視点からインタープリテーションを学ぶことができるプログラム構成となっていることが分かる。

【ハイランド&アイランズ大学パースカレッジ(英国・スコットランド)】

University of Highlands and Islands, Perth College

MSc Interpretation: Management and Practice

Course website: [www.interpretation.uhi.ac.uk](http://www.interpretation.uhi.ac.uk)

Perth College - UHI

Crieff Road

Perth, PH1 2NX UK

Tel. +44 (0) 1738 877371

英国からの事例は修士課程のものになるが、日本や米国の事例とは異なる視点からインタープリテーションを捉えて教育しているので紹介したい。この通信制の修士課程は2007年に設立されたインタープリテーション・スタディーズセンター(CIS: Centre for Interpretation Studies)の下に置かれている。このセンターではインタープリテーションを次のように定義している:

Interpretation is an informal learning discipline that seeks to influence people's social and cultural capital and behaviour. It is used worldwide by governments, public agencies, charitable organisations and tourism businesses to achieve organisational aims ranging from public education to income generation. (※上記ウェブサイトより引用)

インタープリテーションはインフォーマルな学びを扱う分野であり、それは人々の社会的・文化的資本と態度に影響を及ぼすことを目的とする。インタープリテーションは世界中の政府や公的機関、非営利団体と観光ビジネス業界で活用され、その対象は公教育から年金世代へと幅広い層を対象とする各機関の狙いを達成するために用いられている。(筆者訳)

このようにパースカレッジのCISではインタープリテーションを、日本や米国の事例のように科学技術や環境学、レクリエーションという枠組みに当てはめることなく、自然科学と人文・社会科学両方の視点からその活用方法について学べるようになっていく。このコースでは次のモジュール(Module: 科目)から構成されている。

<必修科目> Communication strategies and theories (コミュニケーションの方策と理論) Interpretation purpose and policy (インタープリテーションの目的と方針) Interpretation planning (インタープリテーションのプランニング) Implementation of interpretation. (インタープリテーションの実施)

<選択科目> Communicative design (コミュニケーションデザイン)

Interpreting the historic environment (歴史的環境のインタープリテーション) Interpreting the natural environment (自然環境のインタープリテーション) Interpretive methods and media (インタープリテーションの手法とメディア) Sustainable tourism (持続可能な観光) Visitor studies (来館者調査)

(コースウェブサイトより引用・筆者訳)

上記の科目に加え、修士論文を執筆することで修士号(Master of Science: Interpretation: Management and Practice)が取得できる。さらに論文を書かずに全科目を履修することで大学院ディプロマ

(Postgraduate diploma)を取得でき、必修4科目のみを履修することで大学院免状(Postgraduate certificate)を取得できる。各自がどのレベルまで学位を必要とするかによって選べるシステムになっているのである。

このコースを履修することで、インタープリテーションの対象分野が自然科学に限定されることなく、人文社会科学の分野でも通用するスキルを身につけられるところが特徴的である。将来的には政府機関をはじめ、ナショナルトラストのような非営利団体、商業ビジネスのといった業界で活躍することが期待されるという。学部でどの分野を学んだのかを問わないことから、非常に幅広い層を対象としていることがわかる。これは日本・米国とも異なる展開である。

### (3) まとめ

今回の調査で明らかになったことは、インタープリターおよびコミュニケーター養成は、特定の専門分野の基礎知識を習得することを学部で修了した後、その知識や知見を人々に向けて伝える、プレゼンテーションするというスキルを修士課程以後で学ぶというパターンが形成されていることである。学部レベルでは、まだ専門的な知識を身につける途中であることから、アートのナビゲーターの養成に取り組む事例以外は、国内ではまだほとんど確立されていないことがわかった。

また米国と英国の海外事例から、インタープリテーションそのものの位置づけが異なることで、教育プログラムの組み立て方も異なることが明らかとなった。米国の場合は、学部レベルから一つの専門分野に特化した学びの一部としてインタープリテーションを学べるようになっている。また卒業後にどのような職種、業界に進むことができるかも極めて明確に示されているところが特徴的であった。

英国では大学院レベルではあるが、インタープリテーションを自然科学や人文社会科学といった学問分野の垣根を越えた形でプログラムを展開しており、どの分野でも通用するインタープリテーションスキルの獲得が目指されている。通信課程のみの形態をとっていることから、学部からストレートに大学院に進学する学生向けではなく、社会経験を積んだ人々や現役の社会人をターゲットにしている可能性が高いといえよう。現在活躍している業界・分野でインタープリテーションのスキルを活用するか、他の業界に移るためのツールとして活用する人もいるかもしれない。

日本の学部レベルでインタープリテーションをカリキュラムに取り込む場合、どのようなスキルが身につくのか、それをどのような場面で活かせるのかを具体的に明示することが必要であろう。卒業後の進路との関わりも考えていかねばならない。いわゆる文系・理系といった学問分野の分け方をインタープリター養成課程に導入するべきなのか否かも検討すべき課題である。

## 4. インタープリター養成過程のカリキュラム—National Association for Interpretationによる認定インタープリター養成者(CIG)のためのセミナー

ここでは、筆者(海津)が参加したNational Association for Interpretationによるインタープリター養成者のための講習会(Certified Interpreters Trainers)への参加体験をもとに、同協会の人材養成カリキュラムを紹介する。NAIは、インタープリター養成セミナーの他、インタープリター養成者のためのセミナーを毎年数回開催しており、ここで報告するセミナーは後者のものである。このセミナーは、NAIのインタープリター養成資格取得者の認定証更新講座でもあり、参加対象者は、教師やガイド、博物館、動物園などで人材養成担当者や展示プランナー等である。開催日時は2010年10月

25日～29日(海津は25～27日のみ参加)、場所はオレゴン州ニューポート市ホールマークインで行われ、講師はNAI事務局長のTim MerrimanとLisa Brochuが務めた。

セミナーの大まかな流れは以下の通りである。各日とも朝8時から夕方5時までを講義時間とし、ほぼ5コマずつ行われた。講師と受講者との距離が近く、参加型で活発な講義が連日展開された(写真4, 5, 6)。第4, 5日目の演習を受けることにより、インタープリター養成トレーナーの認定を取得することができる<sup>xiv</sup>。演習内容は、インタープリター養成の模擬講座である。

- 第1日：自己・他己紹介と目的の共有
- 第2日：インタープリテーションのアプローチ、目的の大切さ、組み立て
- 第3日：来訪者への説明技術について
- 第4日：演習、試験
- 第5日：ビデオ撮影による演習



写真3 Tim Merriman による講義



写真4 Lisa Brochu による講義



写真5 受講生は積極的に動いて講義を体で受け止める

使用テキストは、a. Certified Interpretive Trainer Course b. Certified Interpretive Guide Training Workbook、c. Personal Interpretation の3種類を用いたが、専ら使用したのはa.であったが、この中にはbのワークブックの全体が含まれている。同ワークブックは、インタープリターを対象としているので、ここに目次構成を紹介する。

#### 1. はじめに

期待されること／あなた自身の言葉で／インタープリテーションの世界へようこそ／インタープリティブ・ガイドは誰？／NAIの認定プログラム／インタープリテーションの定義／資源と来訪者と目的の融合

#### 2. 参加者を知る

参加者を動かすものは何？／マズローの欲求の段階／マズローの定理を応用する／人々はどうに情報にたどり着くのか／学びのスタイル／あなた自身を知る／参加者の評価を量る／参加者を思いやる

#### 3. 資源を知る

素材を知ろう／バランスの良い情報伝達／出典の明記／調査計画を立てる／何がホットか／前向きな言葉を使う／これは何か／形のあるもの・形のないもの

#### 4. プログラムづくり

インタープリテーションのアプローチ／インタープリテーションは楽しく／展開させる／



自己参照する／関係性を明らかにする／テーマをもつこと／テーマとトピックを明確に／目的を持つ／インタープリテーションは構造をもつ／導入・本体・結論／創造的な人々が好むことは？

#### 5. プログラムの実施

質問の投げかけ戦略／回答方法の戦略／質問と答え／恐れを克服する／声／非言語コミュニケーション／プレゼンテーション・チェックリスト／参加者を扱うための10のガイドライン／インフォーマルなインタープリテーション／インタープリテーションのログブック

## 5. 国際学部におけるインタープリテーション・カリキュラム開発に向けて

以上の調査をもとに、国際学部におけるインタープリテーション・カリキュラムの構築方針として、例えば次のようなユニットとして考えることができる。このうちユニット1は、自然・観光分野と博物館・文化施設分野で共通であるが、ユニット2以降は、分野に分けて進めることが必要となる。

### 国際学部におけるインタープリテーション・カリキュラムの構造例

#### <理論編>

#### ユニット1：インタープリテーションの歴史、定義

発祥と歴史、定義、概念、技術、応用分野、国内外の実践例の紹介など

#### ユニット2：参加者理解

学習理論、多様なニーズ、マズローの欲求の段階、満足度調査など

#### ユニット3：対象(資源)理解

資源についての研究、目に見える情報・見えない情報、伝わり方・伝え方など

#### <応用編>

#### ユニット4：インタープリテーション・プログラムづくり(自然・観光分野、文化・博物館分野)

プログラムの企画、評価、改善、参加者の声のフィードバック、ワークシート作り

#### ユニット5：インタープリテーション・プログラムの演習(自然・観光分野、文化・博物館分野)

成果発表と評価

#### <発展編>

- ・ National Association for Interpretation 認定取得
- ・ 通訳案内ガイド資格取得
- ・ 添乗員認定取得
- ・ 各種のガイド養成講座への参加、認定取得 等

## おわりに

本研究を通じて、インタープリター養成カリキュラムの構築に必要な基礎的情報を取得することができた。インタープリター養成は、本学学生の資質やホスピタリティ関連科目との関係から、本学にふさわしい科目であると考えられる。今後は、①カリキュラム設計、②他機関(とくに認定団体)との連携の構築、③就職や進学等キャリアプログラムの検討等を進めていく必要がある。

## 【注・参考文献】

- i Freeman Tilden (1957) *Interpreting Our Heritage*, UNC Press
- ii 川嶋(1994)の整理によれば、①ビジターセンターでの案内、②トレイルハイク(トレッキングコースをインタープリターとともに歩く)、③遊覧バスツアーのガイド、④野外劇場での映画会、⑤キャンプファイアー、⑥スライドショー、⑦ジョン・ミュアーのお話ショー、⑧その他宿泊型セミナー等が挙げられている。インタープリテーションは、手段を採ばない「伝える技術」として捉えられていることがわかる。
- iii 海津ゆりえ「インタープリター」現代観光学キーワード事典、学文社、1998
- iv 米国のレンジャーが2万人を超えるのに対し、300人程度のレンジャーしかおらず、業務の多くが許認可事項に占められるという現状も存在する。
- v iiiに同じ。
- vi 日本エコツーリズム協会「エコツアー総覧」：[http:// ecotourism.jp/](http://ecotourism.jp/)
- vii フーパーグリーンヒル、E.(2003)「来館者とは能動的なインタープリター、博物館は十分な解釈学的哲学を持つべき」*Cultivate*, vol. 19, p.10.
- viii Hems, A. and Blockley, M., eds. (2006) *Heritage Interpretation*, Routledge: London, p. i
- ix 藤田茂(2009)「オートポイエーシス論によるインタープリターの教育的意義--ミュージアム・ワークショップを通じて」、*教育学雑誌*{44}、pp.101-116
- x 文部科学省(2006)「科学技術基本計画」、[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kagaku/kihon/06032816/001/001.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/kihon/06032816/001/001.htm)(2011年11月アクセス)。なお、科学技術コミュニケーション養成については江水是仁(2010)「理工系博物館学芸員養成と科学技術コミュニケーション」、*東海大学課程資格教育センター論集*(9)、pp1.-11に詳しい。
- xi Paul Caputo, Shea Lewis, Lisa Brochu (2008) *Interpretation by Design*, interpress
- xii Lisa Brochu, Tim Merriman (2008) *Personal Interpretation Connecting your Audience to Heritage Resources*, NAI
- xiii Kathleen Regnier, Michael Gross, Ron Zimmerman (1994) *The Interpreter's Guidebook*, UW-SP Foundation Press, Inc.
- xiv 校務のため第4・5日目の参加が不可となり、認定は取得していない。